～医療生協健文会の職員のみなさま～

メロス通信 不定期便

Vol.08
2023年6月号
発行：地域福祉室

～ さあ、翼をひろげ 紺碧の大空 へ
悲しみのない 自由な 空 へ ～

納屋の燕のヒナたちが巣立ちの時を迎えました。家の周りを飛び回り、しばらくするとまた巣に戻ってきます。だんだん飛ぶ距離を伸ばし、ヒナは自分で餌を捕れるようになります。秋ころには越冬のため台湾や東南アジアの島々に飛び立ちます。集団で旅立つそうです。燕たちの巣立ちを見ていると、入退院を繰り返すある患者さんが頭に浮かびました。

3か月間、車上生活を強いられ、心身ともに疲れ病んでしまったAさんです。どん底の状態で、協立病院に巡り合い、入院。治療と並行して、生活保護申請・住まいの確保をして退院となられました。しかし、その数か月後、体調を崩され再入院。僕は再入院直前からのお付き合いです。Aさんと地域福祉室メロスのスタッフで、家の片づけや車の掃除を一緒にしました。この共同作業での僕との触れ合いは、言葉だけのやり取りより、よほど安心なものと感じてくださったのかもしれません。僕に少しずつ語っていただけるようになりました。車の掃除の最中には「久しぶりに笑えました」、退院されてから支払い手続きで金融機関に一緒に行くと「一人では不安ばかりで、今まで出来ていたことが出来ずに、それを考えると更に不安になって追い込まれていました」と車上生活時の心境を吐露されました。そして、「皆さんが見守ってくれたので、今回の手続きは自分でできました」と笑顔で語られました。窓口で、一人で手続きされるAさんの後姿は、少し自信を取り戻されたようでした。「自信」とは「自分を信じる力」というよりも「自分を信じてくれる人たちの力」なのではないかと思わされた場面でした。「何かのためにする」よりも、「誰かのためにする」。「誰かのため」という思いを持つ人は案外、踏ん張れるものかもしれません。

退院は人にとっての巣立ちのようなものかもしれません。退院の時、退院後の生活において、家族や友人知人や支援機関など多くの関わりを持っている人もいます。しかし、誰との関わりがない人も現実にいます。

コロナ禍でも、変わらず集団で行動する燕たち。その一方で僕たち人間は「人と人との距離」を取り、コミュニケーションの在り方も激変しました。その結果、社会的に孤立し、困っていても誰にもSOSが出せない、支援を受けることが出来ない人が増えてきています。そこで、地域福祉室メロスでは、社会的孤立に置かれた方々が気軽に話ができる場を作ります！その内容は、次回の通信でお知らせします。

先日、地域福祉室メロスから子ども服の寄付のお願いをしたところ、多くの職員の方から寄付が寄せられました。ありがとうございます。

いただいた服は、必要な子どもたちへと行き先が決まりました。お子さんも、その親もニコニコされながら服を選ばれていました。ある、お子さんは、「うわぁ、夏休みが楽しみ！これを着て友達に会おう」と喜び、ある親は「貰ってばかりでは申し訳ないです。うちの子が大きくなって着られない服をよろしければ貰ってもらえませんか？喜んでいただける方がいれば、私も嬉しいです」と子ども服を寄贈されました。子ども服が、皆さんの思いをつなぎ、新しいつながりを創ってくれました。ありがとうございました。

～ 事 務 雑 感 ～

地域福祉室 メロス　田中健之

2021年11月16日、地域福祉室メロスが発足した。何もない部屋に観葉植物とPC2台、ここがゼロポイントフィールド。遡ること数ヵ月前、「 ○○さんご退院です。請求書お願いします 」担当看護師さんから連絡を頂く。未実施確認OK！過剰減点となる項目も点検した、加算も算定済み ⇒ 印 刷　請求書発行！！「 おはようございます（笑顔）○階担当事務の田中です。この度のご請求書です。お支払いは1階受付でカードもご利用頂けます。それでは失礼します。お気をつけて 」すっきり。責任の一端を果たせた安心感に浸る。

ただ、請求書を渡して振り向いた背中で感じていた一抹の不安、退院だから病気（怪我）は治癒しているはず、だけどこの人本当に大丈夫かな…、また病院に戻って来るんじゃないかな…、なんか不安。でも、事務が考えることでもないか…。そんな日々だった。現在、周囲を俯瞰すれば大きな困難を抱えながらなんとか頑張って生きている方が沢山いらっしゃることに驚かされる。まさにSDH。感じていた不安もあながち間違いでは無かった。

職員のみなさま、
心温まる支援の品々、
ありがとうございます。

メロスには日々、西へ東へ奔走する頼りになるMSWが2人いる。事務として微力ながら感じたこと、考えたことは言葉にしてしっかり伝えていこうと思う。患者さんにとっては、全ての職員が健文会であり宇部協立病院だから。